



ありあけ

2021(令和3)年
10月2日(土)

「学び方」を学ぶ

校長 前嶋 正秀

本校が目指している学びのあり方の1つに、「プロジェクト型学習 (Project Based Learning、以下 PBL)」があります。すなわち、知識の暗記などのような、生徒が受動的に学ぶ学習ではなく、「探求」を通して現実世界に主体的に関わることや、個人として意味のあるプロジェクトに取り組むことを目的とした教育法ですが(自ら問題を発見し解決する能力を養うことを目的とした「課題解決型学習 (Problem Based Learning)」とは区別して論じられることがあります。これらはお互いにそれぞれの要素を持ち合っています)、先日この教育法を先駆的に実践している、米国カリフォルニア州にある High Tech High (ハイ・テック・ハイ、以下 HTH) という公立校の記事を目にしました。

HTH は決まった教科書、定期試験がなく、生徒の約半数が低所得層の子だそうですが、96%の生徒がカレッジ以上の大学へ進学し、4年制大学への進学で言えば、カリフォルニア州平均が26%であるのに対し、HTH は54%とほぼ2倍の入学者を出すことで知られているそうです。

記事ではこの理由について、HTH を舞台にしたドキュメンタリー映画のプロデューサーへのインタビューを紹介し、「生徒たちはやっていることが面白いから、早いスピードで学んでいく。先生にたくさんの質問を投げかけ、楽しいから学びも深くなり、そこで得た知識も保持できる」としています。

実際に HTH で高校生に生物や物理を教える教員の授業では、85%を PBL にすることを目指し、小学校1年生を教える別の教員はおよそ半分が PBL だそうです。残りは、知識を直接教えるタイプの従来型の授業だそうです。その中でも、生徒たちが議論しあうように心がけているとのことでした。後者の教員が記事中で語っていた、「単に情報を話すだけだと、人間は多くを忘れる。何かを具体的に示せば、いくらかは覚える。だが、プロジェクトに巻き込めば、人間は理解するものだ」という言葉が印象的でした。

「PBL の究極の目的は、学び方を学び (learn how to learn)、生涯にわたって学ぶ人間を育てることだ」とこの2人の教員は一致して語っています。プロジェクトによって知識もつきますがそれが目的ではなく、「フレームワーク」を学ぶことがより重要なのだといいます。問題に直面し、常に考え、失敗もしながら、解決法を見いだしていくことが大事、ということでしょう。

また、HTH の教育プログラムを日本に導入し、「『探求』する学びをつくる」の著者でもある、一般社団法人「こたえのない学校」代表の藤原さと氏は、「HTH は、公立校であり、さまざまな人種、経済的なバックグラウンドをもつ生徒が集まっている。家庭環境から前向きに生きられなかったような生徒が、PBL を通じて前向きになれるような文化がある」と語っています。日本の若者はとかく「自己肯定感が低い」と言われていますが、この点でも HTH の教育プログラムは大いに魅力があります。

さて本校に立ち返って考えるとき、本校の授業における柱の1つがまさに前述の「学び方を学ぶ」ですから、現在は主に中学の「サイエンス」、高校の「プロジェクト」、そして一部の教科で取り入れている PBL を、少しずつ全学的に広めていくことを目指していきたいと考えています。PBL は、近年ではアクティブラーニング (AL) を指すのに用いられる表現であり、学習指導要領でも謳われている「主体的・対話的で深い学び」との親和性が高いですから、この意味でも今後の方向性として理に適っていると考えています。

9月のご報告

本校ホームページ「最新情報」ページをご覧ください。

【2学期】始業式 on-line ver. 【対面授業再開】2学期初めての登校日 他

*今後の予定については、急な変更の可能性もありますので、学校からのメール連絡をよくご確認ください。

今回10月号の発行・配信が1日遅れまして失礼いたしました。次回は11/1(月)発行予定です。(広報部)